



実習施設（障がい者支援施設・多機能型事業所）が 実習を通し 学生に学んでほしいこととは

著者	加藤 茉奈美
雑誌名	佐野日本大学短期大学研究紀要
号	33
ページ	79-87
発行年	2022-03-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1397/00000157/

実習施設（障がい者支援施設・多機能型事業所）が実習を通し 学生に学んでほしいこととは

What do training facilities (disability support facilities and multifunctional offices) want students to learn through practical training?

加 藤 茉奈美*

KATO Manami

Abstract:

While many students have a negative image of practical training at facilities for people with disabilities, the staff at the host training facility investigated what they would like the students to learn.

The facility staff enjoys the training as much as possible and takes care to learn a lot about disabilities. There is a strong desire to let the trainees know that there are many things that are not only difficult but also fun, and that thought may be conveyed to the trainees, leading to a change in awareness of support facilities for people with disabilities.

キーワード：

施設実習 障がい者支援施設 多機能型事業所 実習受入

1. はじめに

筆者は中学時代の職業体験を機に保育士になるという夢を志し、十数年前に保育士養成課程の学校に入学した。当初は保育園で働くことを考えていたが、「施設実習での実習体験や意識の変化が、施設で働く施設保育士としての就職へつながるきっかけとなる学生が増加してきた現状もある」（大和田、関根、鈴木 2014）¹⁾ という報告のように自身も意識の変化があった一人である。障がい者支援施設で施設実習を行い、障がい者の方たちの優しさ、一生懸命さ等に触れ生活支援員としてサポートをしていく中で自分自身も成長していきたいと思ったからだ。養成校卒業後は、意識の変化のきっかけとなった障がい者支援施設に就職をし

十数年勤務をした。職務内容の中で実習担当を務めた時期があり、実習を行う学生に対して事前オリエンテーション時に「障がいを持った方と関わったことはありますか？」「障がいを持った方に対してどのようなイメージがありますか？」と質問をして学生からの正直な気持ちを聞いていた。ほとんどの学生から「障がい者の方と関わるのは初めてなので、正直怖いです。」と不安を抱え実習に臨む学生が多かった。少しでもその不安が減っていくように近くで学生の様子を見たり、利用者さんの障がい特性を伝え関わり方のアドバイスをしたり、困った様子が見られた時は声をかけていた。実習中盤になると学生たちの自然な笑顔と楽しそうな様子が見られ始める。「施設での実

*佐野日本大学短期大学 総合キャリア教育学科 Sano Nihon University College Senior Lecturer

習に対して、実習前は大きな不安を感じていた学生が実習を終えた後の事後指導のアンケート等において、施設実習は「とても意義があった」と答えたり、施設実習を受ける前と、受けてからの自分の変化について「とても変化した」と答えたりする場合が多かった。」(服部、谷田貝 2010)²⁾ という報告にもあるように、実習最終日の反省会にて実習はどうだったか質問をすると「とても楽しかった。」「障がい者の方に対するイメージが良いほうに変わった。」「施設への就職も考えたい」と最初のマイナスのイメージからプラスに変わる学生が多かった。

II. 目的

本研究では、学生が施設実習（障がい者支援施設、多機能型事業所）をマイナスな

イメージから臨んでいくことが多い中で、受け入れる側の施設職員は学生に対しどのような指導や対応を行ない、実習を通しどんなことを学んでほしいのかということを知るために調べることにした。

III. 方法

1. 調査対象者

障がい者支援施設 2 施設、多機能型事業所 3 施設に勤務する施設長、実習担当者を対象とした。

2. 調査期間と方法

本調査は 2021 年 12 月に 5 項目の記述式アンケート用紙（図 1 アンケート）による調査方法で実施し、同意をいただいた施設長 3 名、実習担当者 14 名の計 17 名の方にご協力をしていただいた。

アンケート

実習施設では学生にどのようなことを学んでほしいのか、そのためにどのような指導をしているのか教えていただきたいと思えます。お忙しいところ恐れ入りますが、ご協力をお願い致します。
 なお、アンケートの結果は施設長を被験者として研究ノート作成に活用させていただきます。

回答者：施設長 ・ 実習担当者（どちらかに〇をお願ひ致します。）

1. 学生に指導する際に気をつけていることはどんなことですか？

2. 障がいを持った方と初めて関わるという学生に対してどのような対応をしていますか？

3. 実習中は学生のどんなところを見ていますか？

4. 学生にはどのようなことを心掛けて施設実習に臨んでほしいですか？

5. 施設実習を通して学生に学んでほしいことはどんなことですか？

ご協力いただきありがとうございます。
 佐野日本大学短期大学 二丁目フィールド助手 加藤実由美

図 1 アンケート用紙

3. 調査項目

調査項目は以下の通りである。(1) 学生に指導する際に気をつけていることはどんなことですか？(2) 障がいを持った方と初めて関わるといふ学生に対してどのような対応をしていますか？(3) 実習中は学生のどんなところを見えていますか？(4) 学生にはどんなことを心掛けて施設実習に臨んでほしいですか？(5) 施設実習を通して学生に学んでほしいことはどんなことですか？について答えてもらった。また、回答者は施設長と実習担当者どちらなのか記入をいただいた。なお、本研究は令和3年度 佐野日本大学短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て進められた（承認番号第 21037 号）

IV. 結果及び考察

記述内容を整理し考察を行なった。(○印は施設長、△印は実習担当者からの回答)

(1) 学生に指導する際に気をつけていることはどんなことですか？

- 緊張しすぎず実習に臨めるよう声かけを心がけている。施設、障がい者に対して明るい思いを残せるように…。
- 実習中の健康状況や気持ちの安定について気を付けている。
- 実習中に困っている事はないか等、本人の表情や動きを観察している。
- 目の前の利用者に対する実習生の反応を否定せず、そこがスタートであることを受け止め、実習生の気持ちや印象の変化を共有する。
- △言葉づかい。知的障害がある利用者に関わる中でも、敬語で話す。名前を呼ぶ時は、○○さんと呼ぶように伝えている。
- △個人情報。実習中に知った情報は、他にももらさないよう伝えている。

- △注意をする際、学生が不快にならないように伝え方に気をつけている。
- △わかりやすい様に施設の説明や利用者の事を伝えるようにしている。
- △利用者の良い所、悪い所両方を伝えるよう気をつけている。
- △利用者の特性と合わせ、こういった支援を行い、現在の状況をその都度伝え、短い期間で利用者の生活や支援の意味を学べるようにしている。
- △施設のことや利用者のことを説明する際に、普段私たち支援員が日頃使っている用語は極力使わず学生の理解しやすい言葉を選んでいる。
- △分からないことがあったらその場で支援員に質問するよう伝えますが、現場も忙しく学生の方から質問するのも難しい状況もあるためこちらからも声をかけるよう心がけている。
- △施設の概要や日課、法的なものだけにとどまらず実際にどのような思いで生活をしているのか、また、周囲のサポートを受けながら本人らしい生き方を目指しているのかを現場での経験を通して学生に伝えられるように気をつけている。
- △学生さんの緊張の程度や表情・行動を見てどのような話し方で伝わるのか？理解しやすい言葉を選んでいる。
- △理解度に合わせた指導△利用者との距離感について。
- △実習期間が楽しめるように少しでも身につけられるように具体的に説明している。
- △なるべく分かりやすく具体的な言葉での説明。
- △専門用語や我々の中では当たり前だと思っている言い回し（省略語）についてできるだけ気をつけている。
- △あくまで実習生であり「外部の方」と

いう意識を持って失礼のない態度を心掛けています。

△個人の性格や特性等を配慮している△

話を聞く時間を1日1回は設けている。

△子ども扱いをしない、やってあげ過ぎない。

△一人ひとり名前があり個性があることを伝えている。

△多くの利用者に関わり、様々な作業や活動が体験できるように、コロナ禍で実習することのできない食事・入浴等の身体介護の場面も見学できるように配慮している。

実習生の心身を気にかけていること、施設や利用者さんについてわかりやすく具体的に説明をし、実習生が学びやすい環境作りを意識している内容の回答が多かった。実習生にとって初めての環境であり、どんな職員や利用者さんたちがいるのか？どんなことをするのか？何も分からない不安や緊張の状態から実習に臨む学生のストレスはとても大きいものである。なかなか自分から不安や体調不良を口に出すことが出来ない学生もいると思われるため、声をかけてもらえるということは実習生にとって実習を進めていく中での安心材料の一つになるのではないかと考えられる。また、施設や利用者さんについて具体的に説明してもらえることで早く施設と利用者さんについて理解することができ、11日間という限られた日数の中で多くのことを学ぶことが可能になるのではないかと考えられる。

(2) 障がいを持った方と初めて関わるといふ学生に対してどのような対応をしていますか？

○介助・支援しやすい方から接してもらうようにしている。

○言葉が通じず不安に思うだろう場面で

のフォロー。

○障がい特性からくる行動に対しての説明。

○障がい状況を丁寧に説明し、理解してもらうことで施設の目的や役割を知り安心して実習できるように対応している。また、職員の動きや表情でこの仕事の楽しみを知ってもらうことも対応として重要と思われる。

○不安であることは自然な感情として受容し、表情や挨拶の変化を観察しながら必要に応じて声をかけるようにしている。

△一人一人の特性を伝えたり、困った様子があれば声をかけ、利用者との交流ができるように場を作り対応している。

△健常者と同じように遠慮はせずに関われるように、私たち職員も楽しそうに関われるようにしている。

△それぞれの利用者の特性などを説明し、相手に対し興味を持ってもらえるように伝えている。

△緊張から始まることもあると思うので、実習が楽しく学べるよう私たちも楽しく関わっている様子を見てもらっている。

△不安を軽減できるよう、言葉でのやり取りが可能な方から関わってもらうようにしている。

△障がいを持った方との関わりは一人一人違うことを説明（コミュニケーションの取り方や距離感、好きなもの障がい特性等それを理解し、その人に寄り添った支援・関わりをしていくことにより信頼関係を築いていく等）。その後、実際「この利用者さんとはこういう風に関わるといいですよ」と具体的に説明している。

△「障がい」というイメージ（こわい・わからない等）が自分の中にどのよう

実習施設（障がい者支援施設・多機能型事業所）が実習を通し学生に学んでほしいことは

な形であるのか自覚することは大きな学びの一步であることを伝えている。ただそのイメージにとらわれすぎず、まずは「挨拶をする」「自己紹介をする」「相手の名前を覚えて呼んでみる」等から始められるように伝えている。

△知的・精神・身体障がいと言っても様々な特性があるので利用者さんのタイプ別にわけてどのような方が利用されているか伝えている。

△構えすぎない・緊張しすぎないような声掛けと障がいはあくまで利用者本人の側面であり障がいが全てではないので、そこにばかり目を向けすぎないような対応をしている。

△障がいがあるからといって構えてしまわないよう、普通に接してほしいことを伝え、接する方法の提案をし、一緒に活動に参加するようにしている。

△事前にどのようなこだわりがあるか等、なるべく具体的に伝えられるようにしている。距離感が分からない、身体に触ったりすることがあるかもしれない等、想定できることについては伝え、困った時は職員に伝えてくださいとお伝えしている。

△障がい特性に応じた配慮すべき点についてその都度伝えている。しかし、基本的には障がい者・健常者にかかわらず人への敬意を持って接することが基本であることをお伝えしているつもりである。

△施設の内容や利用者の状況（良いところ・危険性も含めて）について説明する。

△関わりやすい人から接してもらう。

△とにかく名前と顔を一致できるようにする。

△笑顔で元気にあいさつをするようアドバイスする。

△本人が不安な時には話を聞き、まずは

実際に関わってもらっている。

△コミュニケーションの方法が分からない時には具体的にアドバイスをすることもある。

言葉のやり取りができる関わりやすい方から接してもらい、利用者さんの特性に合わせた関わり方や配慮すべき点の説明についての回答が多かった。初めて障がいを持った方と関わるという実習生にとって、相手の利用者さんの特性について事前に情報を教えてもらえることでコミュニケーションが取りやすくなると考えられる。また、関わる利用者さんが会話のできる方であれば実習生は安心して話しかけることができるのではないだろうか。

(3) 実習中は学生のどんなところを見ていますか？

○利用者自ら声をかけているか。

○わからないことを支援員に聞いているか。

○あいさつ・返事・適切な言葉使いができてきているか。

○実習生が楽しく関わる事が出来ているか？表情や動き、利用者との関わり方を見ている。また、将来どんな職場を希望しているかもお聞きしている。

○利用者への視線、アプローチの仕方。

○支援員への質問の有無等。

△積極性。自ら関わろうとする姿勢や支援員からの助言等を聞く姿勢。

△多くのことに興味を持ってているか。

△コロナ禍のため、難しいが表情や利用者との関わり。

△基本的な事（挨拶・言葉使い）を含め意欲的であるか。また、表情や積極性・日誌の内容や何に疑問を感じているのか等を見ている。

△実習初日に感じた施設の様子や利用者

のイメージが実習過程においてどのように変化していくのかを本人の姿勢や日誌から注目するようにしている。また、そうした変化を学生自身が気付けるように反省会等を通して伝えている。自分自身の価値観や傾向を人との関わりの中で気付けることがこの実習においての大きな得ものになると思っている。

△実習ノートを見て学生さんの得意・不得意な部分を確認しながら助言し、行動に変化がみられているか。

△基本として挨拶がきちんとできているか。

△積極的に関わりを持つようとしているか。

△自発的に行動できているか。(自分から何をすればよいか聞くことができる等)

△分からないことを分からないまま終わらずにきちんと聞くことができるか。

△実習に対する姿勢や言葉づかい、表情や服装や意欲など。

△実習ノート(疑問や目標をしっかりと持っているか)

△話を聞く姿勢、どのくらい興味や関心を持ち話を聞いていてくれるか。

△利用者さんへの接し方、適切な距離感、言葉づかいで接することができるか。

△周囲への配慮、気づきの力等。

△表情や目の動き。時間を守れているか。関わりの中に自分なりの発想はあるか。

△体験したこと、説明したことを学びとして覚えているかどうか。

社会人としての基本的なマナー(挨拶、言葉づかい、服装)や積極性、意欲的であるかという回答が多かった。実習は授業で学んだことを活かして実践することができ、更にテキストには載っていない多くのことを学べる機会である。その機会を積極

的に学ぼうとする一生懸命な姿やマナーが良い学生はとても良い印象を受けられるのだろう。

(4) 学生にはどのようなことを心掛けて実習に臨んでほしいですか？

○理解できない、できない事もある人達であっても大人であるので、子ども扱いをせず一人の人として接することを心掛けてほしい。

○社会人として常識ある態度を持って実習してほしい。(利用者さんはよく見て、感じているため)

○色々な利用者さんや職員と会い、何か吸収しようとする心構えで来ていただきたい。

○個々の障がいと集団としての障がいの違いなどや家族とはを考える機会にしてほしい。

○支援員の関わり方にどんな根拠があるのかを学んでほしい。

○身構えず、自然体で臨んでほしい。

○様々な自分の感情に気づき、言語化してほしい。

△少しでも多くのことを学び、吸収してほしい。

△初めての施設実習の方が多く、分からないことが当たり前なので積極的に質問してほしい。

△最低限のマナー(挨拶、掃除の仕方、お茶の入れ方等)は心掛けてほしい。

△保育者を目指す上でなぜ施設実習が必要なのか、また、興味を持って取り組んでほしい。

△先入観に囚われず、広い視野を持って実習に臨んでほしい。

△障がいを持っており知的に遅れがあり幼く見えても、一人の大人として接することは頭に入れておいてほしい。

△この実習では利用者さんを「障がいを

抱える人」という側面のみで捉えるのではなく、「地域で暮らす生活している人」であることを忘れずに関わりを持ってほしいと思っている。「障がい」というものは自分とは関係のないこと、未知のことではなく自分の暮らしているコミュニティにも存在することであるということ意識してほしい。

△身内に障がいを持たれた方がいたらばと想定し、施設職員や家族の立場を思いながら何ができるのか？また、障がいを持たれた方が何を求めているのか、広い視野を持ち臨んでいただきたい。

△分からない、知らないことは当たり前なので、まずは挨拶、丁寧な言葉づかいを心掛けてほしい。また、積極性、自発性、自分なりの考え等を心掛け、報連相を大事にしてほしい。

△単位を取るだけのための学生か真剣に取り組む学生か、ある程度の態度でどんな姿勢で来ているかわかってしまう。嫌であっても何かしら、自分のためになるものを見つけられるよう目的を持って臨んでほしい。

△実習中何か一つでも疑問や興味を持つよう、前向きに取り組んでもらいたい。

△折角の機会なので貪欲に積極的に学んでいただきたい。

△対応できるかどうかは別として、“こんなことをやってみよう”等、遠慮せずに教えてほしいと思っている。

△疑問に思ったこと、モヤモヤは聞いてほしい。

△一人一人名前があり、個性があるということ（こだわりやベース）

△障がいを持っている人はかわいそう、何もできない人？

△ただ利用者さんとコミュニケーションをとり作業を行なうのではなく、支援員がどの様に考え動いているのかとい

う目線を持って実習は臨んでほしい。

(3)と同様に積極性について、または疑問や目的を持って臨んでほしいと回答する方が多かった。実習生の中には「保育園で仕事をするためには保育士の資格が必要だから、とりあえず実習をしておけば…」という考えを持っている学生もいると思われる。しかし、普段から利用者さんの様子を観察し支援を行なっている職員は観察力があるため、学生のやる気等も行動や表情でわかってしまうのだろう。実習自体が何度も行なうことのできない貴重な機会のため、またその実習先でしか学べないこともあるので大切にしてほしいのではないだろうか。

(5) 施設実習を通して学生に学んでほしいこととはどんなことですか？

○障がい者と接する事で障がい者の生活（喜び・楽しさなども）を知ってほしい。

○障がい者支援に必要なスキルを少しでも感じ学んでほしい。

○生命を生み育てることの意味を学んでほしい。

○生活や家族、社会参加等を学んでほしい。

○地域社会に実習生ご自身、障がいのある方等の社会参加の場がどれくらいあるのか。また、どんな意味を持っているのか。

○利用者の状態に触れ、気づき、利用者の親、きょうだい等の家族の思いを考え、地域社会の支える側の一員になってもらい、その必要性を学んでほしい。

△障がいがあっても、できることの楽しさを見つけながら作業している様子や人との関わり等を知ってほしい。

△利用者は私たち健常者と同じでひとり一人個性があり、自分の意思をしっかりと持った方もいるので“障がい”に

- 囚われすぎないでほしい。
- △不安や戸惑いもたくさんあると思うが、まずは“障がい”に囚われず楽しいと感じてほしい。そこから少しずつでいいので、知的・身体・精神障がい者への援助の仕方、一人一人への個別の対応など福祉とは何かを学んでほしい。
 - △利用者との関わりを通し、一人ひとりに合わせた支援の重要性。
 - △障がい者支援と保育の関連性。
 - △相手の立場からの視点。
 - △施設には様々な障がいを持った方がいてそのことをきちんと理解し接していくことを頭に入れてもらい、現場の支援員が行っている支援の方法を学んでほしい。
 - △机上の勉強だけでは得られない現実をこの実習を通して体験し学んでほしい。また、この実習で得た知識や経験は将来、保育士をはじめとした対人援助職になった時に必ず自分自身をより成長させてくれると思う。
 - △実習施設によって関わり方や日課等違うと思うので、見て体験して色々な考え方を吸収して、支援方法、更には就職活動の参考になることを学んでいただけたらと思う。
 - △「障がい」というものに対しての正しい知識と関わり方を学んでほしいと思う。
 - △施設に通っているみなさんも学生と同じように生活し、自立し楽しんでいることを見てほしいと思う。
 - △保育の現場でも同じだと思うが、支援はうまくいくことばかりではなく試行錯誤の繰り返しであること。障がいのある方との関わりの中で“楽しい”と思ってもらえる瞬間が1つでもあると良いなと思っている。
 - △座学では学べない事（職員同士でのコ

ミュニケーションの仕方等）と座学で学んだことを現場で照らし合わせる機会として活用していただきたい。

- △障がいを持っている人たちの力を感じてほしい。
- △関わる中で、一緒に何かをする中で気持ちを通い合う感覚を感じてほしい。様々な利用者と積極的に関わり、たくさんの利用者個人の特性や支援員がどの様に工夫して支援しているのかを学んでほしい。

障がいがあるから何もできないというわけではなく、自立し楽しんでいるということを知ってほしいという内容が多かった。「障がい」という言葉のイメージから「何もできないのでは?」「大変そう」と想像する人が多いのではないだろうか。しかし、それは自分たちの勝手な想像で「実際はそうではない」ということに実習を通し知ってもらいたいという思いが感じられる。

V. まとめ

実習生が持つ障がい者へのイメージがマイナスからプラスへ変わる理由の一つとして、施設側が少しでも実習を楽しんで障がいについて多くのことを学べるよう配慮していることを知ることができた。また、施設では大変な事ばかりではなく楽しいことも多くあるということを知ってもらいたいという思いが強くあり、その思いが実習生にも伝わり意識の変化につながっているのだろう。筆者自身も実習生には自分たちよりも障がいのある方たちの方が凄いなと思うところや見習わなければいけないと学ばせていただくことがあるということをお伝えしていた。実際に障がい者の方たちの生活の様子を見ること、コミュニケーションを取ることで気がつくこと、感じるものがたくさんある。学生たちには、職員の思いや

願いを少しでも知ってもらい、たくさんの利用者さんとコミュニケーションを取って障がいのある方たち一人一人の良い部分をたくさん見てもらいたい。

謝辞

本調査にあたり、アンケート調査にご協力していただいた障がい者支援施設、多機能型事業所の施設長、実習担当者の方に心より感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

- 1) 大和田明見・関根美保子・鈴木春江 (2014)「保育士養成課程における施設実習の意味と意識の変化」帝京大学教育学部紀要 2 : 275 - 284
- 2) 服部次郎 谷田貝雅典 (2010)「保育実習（施設）の意義について—実習を終えた学生のアンケートから見えるもの—」岡崎女子短期大学研究紀要 第 43 号: 47 - 54

